

# 壁面 11

2022.11.25  
執筆発行／池田康

## 本懐

とともに 星の数ほどもある同期に埋もれ

瘦せた低木は森に呑み込まれてしまう

その恐怖を思うと息苦しくなる

おおけなく大きな野心をもちながら書庫で大人しくしてい

るのは

あまりに優等生 その良い子ぶりが歯がゆく

思わず出ていきたくなる

誰かおいらを盗み出してくれ

\*

本は恥じらう

古書店で二束三文の値をつけられ

店の外のワゴンに入れられる 屈辱

おおけなく大きな野心が怒りとなって店を焼き滅ぼす――

の惨事を真剣に心配する

誕生時に千冊いたわが兄弟たちは

あるいは熱烈な愛読者にめぐまれ

あるいは立派な図書館に収まり

多くは幸運厚遇を享受しているのに

この有様はなんだ

なんの思想もないバーゲンワゴン

道端はうるさくて埃っぽくて本を置く場所じゃない

ああ 陽が当たりすぎて眩しい

\*

本は恥じらう

自分が大切に運んできた言葉はでたらめだった？

吾輩を手に入れた読者は凝り性の一本気の学者のようで

丹念に読んで余白にどんどん書き込みをする

論旨に疑問があるらしく

きびしい反駁や批判が赤インクでくつきりと記され

吾輩はみるみる自信をなくしてゆく

吾輩は無価値なのだろうか

世界にとつて有害の書なのだろうか

わがおおけなく大きな野心はどうなる？

もうすぐすべての頁に赤い文字が記され

否定される……

\*

本は恥じらう

著者や編集者はもう死んでしまったが

本はそれを超えて承らえる責務がある

それはわがおおけなく大きな野心の一部なのだが

体の内部の一カ所が疼くのは困惑する

四十五頁の六行目に残っているのだ

著者も編集者も気づかなかった誤字が

わが完璧はいまや破綻している

このまま百年も千年も承らえなければならぬのだから

か？

恥辱！

誰か四十五頁の誤植を直してほしい

\*

本は恥じらう

あまりに華やかなカバーに包まれて

照れくさいを通り越して罪深い

簡素を宗とし 紙の素の色を生かすべし

とは古の大先達の至上の教え

美しいカバーは小生のおおけなく大きな野心となんの関係

もなく

なんのたしにもならない

百年経てばきれいなおべも色褪せてしまうだろう

だがしかし

おろおろと恥じらいながらも

美しい意匠に包まれているわが身を愛しむ

\*

本は恥じらう

お調子者の帯がしゃべっていることは誇大広告だ

世界が驚く！なんて そんなことあるものか

たしかにそれはおおけなく大きな野心の一部ではあるが

野心は野心 現実<sup>リアリティ</sup>は現実 分けて考えろ

とはいえ本の現実<sup>リアリティ</sup>は活字の次元にはなく

読み手との交感の次元にある

読者を驚かせ喜ばせるのが本の本分であるかぎり

この帯は正しい あまりにも正しい

だから この帯をはぎとって捨ててくれ

なんてききな啖呵は切らないのだ

\*

本は恥じらう

本として生まれながら

一度も読まれたことのないこの悲運

孤独の闇に閉ざされている頁

妾はなんのためにあるのか

妾に約束された栄光はどこへ行ったのか

目によって活字が辿られるあの快感を

典雅にやさしく朗読されるあの恍惚を

暴れる頁を押さえ、めくる指のぬくもりを

読み進める都度に葉がはさまれるわくわくを

妾は知らない

たれか妾を読んでおくれ めくっておくれ

三百年先でもいい たれか妾を

\*

本は恥じらう

たかだか葡萄一房ほどの値をつけながら

おおけなくも大きな野心を抱かされて

さしたる批評の歓迎もなく

秤にのせると四百グラム

そんな訳はない 単位が違う 四百トンだろう

と喚いても 冗談にもならない 呆れられるだけ

大きな野心をどうしても捨てられないのが辛いところ

この世のすべての葡萄と葡萄酒を集めてもこの一冊にはか

なわない

と言つてみたい いや

口走つてしまうのだ

\*

本は恥じらう

俺を読んである人は絶望した

ある人は盗みを働いた

ある人は革命を計画した

すべて誤解

と切り切れるほど俺は潔白だろうか

わがおおけなく大きな野心は悪魔的ではないのか

俺は誕生時から呪われているのだろうか

わからない

たしかなのはこれが刻まれた言葉であり

言葉を運ぶことが本の仕事であり

本は自分の運命を墨守するということ

\*

本は恥じらう

所詮紙の束に過ぎないのに

かすかにもバベルの遺志を継ぎ

人間を超える超人計画の一表現として存在せよ

千年 五千年 一万年を輝かしくみのらせよ

おおけなくも大きな野心を背負わされた

この身は精神の金の壺であり

思考と心情の究極の棺であり

墳墓は永遠のピラミッドであれと願う

むやみやたらな悲願

福音たろう審判たろうとする生成りの意志

が怖い

本は恥じらう

おおけなく大きな野心を抱き

大仰に有意義な振りをしているが

案外からつぼの虚無 かもしれず

叡智 という言葉を口にしてみたとて

それも実体なき幽霊だとしたら

本を名乗るはおこがましい

本の形をした馬鹿なオーナメント

おおけなく大きな野心の髄には懷疑と恥じらいがある

せめて口をつぐみ

偉そうにもつたいぶつて

大声を出さないことだ

\*

本は恥じらう

本屋で幼い手が自分を取るとき

この子と対話できるだろうか

この子は私を喜んでくれるだろうか

かさばる五百頁の底に隠れている

おおけなく大きな野心をかすかにでも感じてくれるだろう

か

いやそれは感じてくれなくてもいい

まず対話がしたい

まず挨拶ができれば と

願うがめつたに許されぬ

\*

本は恥じらう

図書館の書架に並べられ

古今東西あらゆる分野の本の一員になれた誇らしさ